

小倉百人一首

『小倉百人一首』（本文参照）を、初句の五十音順に配列した。
白抜き数字は配列順を、その下の数字は歌番号を示す。
下の句からも検索できるよう、下段にその索引を掲載した。

- 79 秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ
1 秋の田のかりほの庵の苫をあらみ 我が衣手は露にぬれつつ
2 明けぬれば暮るるものとは知りながら なほ恨めしき朝ばらけかな
3 あさぢふの小野の篠原のしのぶれど あまりてなどか人の恋しき
4 朝ばらけ有明のけの月と見るまでに 吉野の里に降れる白雪
5 朝ばらけ宇治の川霧はたえたえに あらはれわたる瀬々せの網代木
6 あしびきの山鳥の尾のしだり尾の ながながし夜をひとりかも寝む
7 淡路島のかよふ千鳥の鳴く声に 幾夜よくねざめぬ須磨の関守
8 あはれともいふべき人はおもほえて 身のいたづらになりぬべきかな
9 逢ふ見ての後の心にくらぶれば 昔は物を思はざりけり
10 逢ふことの絶えてしなかなかに 人をも身を恨みざらまし
11 天つ風雲のかよひ路吹きとぢよ をとめの姿しばしとどめむ
12 天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも
13 あらざらむこの世のほかの思ひ出に いまひとたびの逢ふこともがな
14 あらし吹く三室の山のもみぢ葉は たつたの川の錦になりけり
15 有明けのつれなく見えし別れより あかつきばかり憂きものはなし
16 有馬山猪名の笹原に風吹けば いでそよを忘れやはする
17 いにしへの奈良の都の八重桜を けふ九重の山にほひぬるかな
18 今来むと言ひしばかりに九月の 有明けの月を待ち出でつるかな
19 今ほはた思ひ絶えなむとばかりを 人つてならでいふよしもがな
20 うかりける人を初瀬の山おろしよ はげしかれとは折らぬものを
21 恨みわび干さぬ袖でたにあるものを 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ

- 〈新古今・秋上・四三・藤原頭輔
後撰・秋中・三三・天智天皇
後拾遺・恋・六三・藤原道信
後撰・恋・七七・源等
古今・冬・三三・坂上是則
千載・冬・四四・藤原定頼
拾遺・恋・七六・柿本人麻呂
金葉・冬・三三・源兼昌
拾遺・恋・七〇・藤原伊尹
拾遺・恋・七〇・藤原敦忠
拾遺・恋・七六・藤原朝忠
古今・雑上・八三・良岑宗貞
古今・羈旅・四六・安倍仲麻呂
後拾遺・恋・七三・和泉式部
後拾遺・秋下・五六・能因法師
古今・恋・三五・壬生忠岑
後拾遺・恋・七九・大式三位
詞花・春・二九・伊勢大輔
古今・恋・九一・素性法師
後拾遺・恋・七五・藤原道雅
千載・恋・七六・源俊賴
後拾遺・恋・八五・相模

下の句から上の句を引く索引

- 16 ↑あかつきばかり憂きものはなし
87 ↑葎のまろ屋に秋風ぞ吹く
64 ↑逢はでこのよを過くしてよとや
52 ↑あはれ今年の秋もいぬめり
89 ↑あまの小舟の綱手かなし
4 ↑あまりてなどか人の恋しき
6 ↑あらはれわたる瀬々せの網代木
19 ↑有明けの月を待ち出でつるかな
59 ↑いかに久しきものとかは知る
8 ↑幾夜よくねざめぬ須磨の関守
41 ↑いづくも同じ秋の夕暮れ
75 ↑いつ見きとてか恋しかるらむ
17 ↑いでそよ人を忘れやはする
14 ↑いまひとたびの逢ふこともがな
100 ↑今ひとたびのみゆき待たなむ
27 ↑憂きにたへぬは涙なりけり
58 ↑憂しと見し世ぞ今は恋しき
35 ↑おきまどはせる白菊の花
24 ↑かけじや袖の濡れもこそすれ
60 ↑かこ顔なるわが涙かな
83 ↑傾かぐまでの月を見しかな
68 ↑かひなく立たむ名こそ惜しけれ

23 奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の 声聞く時ぞ秋はかなしき
 24 音に聞く高師^{たか}の浜のあだ波は かけじや袖^{そで}の濡れもこそすれ
 25 大江山^{おほえ}いく野の道の遠ければ まだふみも見ず天^{あま}の橋立^{はしだて}
 26 おほけなくき世の民におほふかな わが立つ袖^{そで}に墨染^{すみぞめ}の袖^{そで}
 27 思ひわびさても生命^{いのち}いちはあるものを 憂^{うれ}きにたへぬは涙なりけり
 28 かくとだにえやはいぶきのさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを
 29 かささぎの渡せる橋に置く霜の 白きをみれば夜ぞ更けにける
 30 風そよぐならの小川^{おがわ}が夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける
 31 風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ くだけて物を思ふころかな
 32 君がため春の野に出いでて若菜^{わかな}つむ わが衣手^{きこ}に雪は降りつつ
 33 君がため惜しからざりし命^{いのち}さへ 長くもがなと思ひけるかな
 34 きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに 衣^{きぬ}もかたしきひとりかも寝^ねむ
 35 心あてに折らばや折らむ初霜^{はつしも} おきまどはせる白菊^{はくきく}の花
 36 心にもあらで憂^{うれ}き世にながらへば 恋しかるべき夜半^{よなはん}の月かな
 37 来^きぬ人をまつほの浦の夕なぎに 焼くや藻塩^{そうしほ}の身もこがれつつ
 38 このたびは幣^{へい}も取りあへず手向山^{てむかやま}に 紅葉^{もみぢ}のにしき神のまにまに
 39 恋すてふわが名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか
 40 これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬも逢坂^{あしか}の関
 41 さびしさに宿^{しゆく}を立ち出いでてながむれば いづも同じ秋の夕暮れ
 42 のぶれど色にいでにけりわが恋は ものや思ふと人のとふまで
 43 白露^{はくろ}に風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける
 44 住江^{すゑ}の岸に寄る波よるさへや 夢の通^{とほ}ひ路^ぢ人目^{ひとめ}よりくらむ
 45 瀬を早み岩にせかるる滝川^{たきがわ}の われても末^{すえ}に逢^あはむとぞ思ふ
 46 高砂^{たかさ}の尾の上^{うへ}の桜咲きにけり 外山^{そとやま}の霞^{かすみ}かすみたすもあらなむ
 47 滝の音はたえて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ
 48 田子の浦にうち出いでて見れば白妙^{はくみょう}の 富士の高嶺^{たかね}に雪は降りつつ

〈古今・秋上・二五・猿丸大夫〉
 〈金葉・恋下・四六・紀伊〉
 〈金葉・雜上・五五・小式部内侍〉
 〈千載・雜中・二毛・慈円〉
 〈千載・恋・三八・道因法師〉
 〈後拾遺・恋・一六三・藤原実方〉
 〈新古今・冬六・六〇・大伴家持〉
 〈新勅撰・夏・二五・藤原家隆〉
 〈詞花・恋上・二二・源重之〉
 〈古今・春上・三二・光孝天皇〉
 〈後拾遺・恋・二六九・藤原義孝〉
 〈新古今・秋下・五八・藤原良経〉
 〈古今・秋下・二七・凡河内躬恒〉
 〈後拾遺・雜・一六〇・三条院〉
 〈新勅撰・恋・八九・藤原定家〉
 〈古今・羈旅・四四・菅原道真〉
 〈拾遺・恋・三一・壬生忠見〉
 〈後撰・雜・二〇八・蟬丸〉
 〈後拾遺・秋上・三三・良暹法師〉
 〈拾遺・恋・一三三・平兼盛〉
 〈後撰・秋中・三〇・文屋朝康〉
 〈古今・恋・五九・藤原敏行〉
 〈詞花・恋上・三元・崇徳院〉
 〈後拾遺・春上・三〇・大江匡房〉
 〈拾遺・雜上・四四・藤原公任〉
 〈新古今・冬六・五五・山部赤人〉

54 ↑ からくれなるに水くくるとは
 79 ↑ 霧立ちのぼる秋の夕暮れ
 31 ↑ くだけて物を思ふころかな
 80 ↑ 雲がくれにし夜半^{よなはん}の月かな
 61 ↑ 雲のいづこに月宿るらむ
 97 ↑ 雲居^{うも}にまがふ沖つ白波^{しらかな}
 18 ↑ けふ九重^{ここのへ}ににほひぬるかな
 96 ↑ 今日を限りの命ともがな
 36 ↑ 恋しかるべき夜半^{よなはん}の月かな
 56 ↑ 恋ぞつもりて淵^{ふち}となりぬる
 22 ↑ 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ
 34 ↑ 衣^{きぬ}もかたしきひとりかも寝^ねむ
 67 ↑ 衣^{きぬ}もほすてふ天^{あま}の香具山^{かぐやま}
 23 ↑ 声聞く時ぞ秋はかなしき
 28 ↑ さしも知らじな燃ゆる思ひを
 69 ↑ しづなく花の散るらむ
 50 ↑ 忍^{しの}ぶることの弱もぞする
 40 ↑ 知るも知らぬも逢坂^{あしか}の関
 29 ↑ 白きをみれば夜ぞ更けにける
 53 ↑ 末の松山波越^{なみり}さじとは
 73 ↑ ただ有明^{ありあけ}の月ぞのこれる
 15 ↑ たつたの川の錦^{にしき}なりけり
 43 ↑ つらぬきとめぬ玉ぞ散りける
 46 ↑ 外山^{そとやま}の霞^{かすみ}かすみたすもあらなむ
 33 ↑ 長くもがなと思ひけるかな
 7 ↑ ながながし夜をひとりかも寝^ねむ

49 立ち別れいなばの山の峰に生おふる まつとし聞かば今帰り来む
 50 玉の緒と絶えなば絶えねながらへば 忍ぶることの弱りもぞする
 51 誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに
 52 契りおきさせもが露を命にて あはれ今年の秋もいぬめり
 53 契りきなかつたみに袖ををしりつつ 末の松山波越さじとは
 54 ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれないに水くるとは
 55 月みればちちに物こそかなしけれ わが身ひとつの秋にはあらねど
 56 つくばねの峰より落つるみな川 恋ぞつもりて淵となりぬる
 57 ながからむ心も知らず黒髪に 乱れて今朝は物をこそ思へ
 58 ながらへばまたこの頃やしのばれむ 憂うしと見し世ぞ今は恋しき
 59 嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は いかに久しきものとかは知る
 60 なげけとて月やは物を思はする かこち顔なるわが涙かな
 61 夏の夜はまだ宵ながら明けるを 雲のいつこに月宿るらむ
 62 名にしおはば逢坂山のさねかづら 人に知られでくるよしもがな
 63 難波江の葦のかりねのひとよゆゑ みをつくしてや恋ひわたるべき
 64 難波江の葦のかりねのひとよゆゑ 逢はでこのよを過ぐしてよとや
 65 花誘ふ風あらしの庭の雪ならで ふりゆくものはわが身なりけり
 66 花の色は移りにけりないたづらに 我が身世にふるながめせしまに
 67 春過ぎて夏来きにけらし白妙の衣もほすてふ天の香具山や
 68 春の夜の夢ばかりなる手枕たに かひなく立たむ名こそ惜しけれ
 69 ひさかたの光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ
 70 人はいさ心も知らずふるさと 花ぞ昔の香かにほひける
 71 人もをし人もうらめしあぢきなく 世を思ふゆゑに物思ふ身は
 72 吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風をあらしと言ふらむ
 73 ほととぎす鳴きつる方をながむれば ただ有明けの月ぞのこる
 74 御垣守の衛士のたく火の夜は燃え 昼は消えつつもをこそ思へ

〈古今・離別三・在原行平〉
 〈新古今・恋・一〇五・式子内親王〉
 〈古今・雑上・九〇・藤原興風〉
 〈千載・雑上・一〇六・藤原基俊〉
 〈後拾遺・恋四・七〇・清原元輔〉
 〈古今・秋下・二五・在原業平〉
 〈古今・秋上・三三・大江千里〉
 〈後撰・恋・三七・陽成院〉
 〈千載・恋三・一〇三・待賢門院堀河〉
 〈新古今・雑下・一〇三・藤原清輔〉
 〈拾遺・恋四・二三・藤原道綱母〉
 〈千載・恋三・三九・西行〉
 〈古今・夏上・三六・清原深養父〉
 〈後撰・恋・三〇・藤原定方〉
 〈千載・恋三・八七・皇嘉門院別当〉
 〈新古今・恋二・一〇九・伊勢〉
 〈新勅撰・雑・一〇五・藤原公経〉
 〈古今・春下・二三・小野小町〉
 〈新古今・夏・一五・持統天皇〉
 〈千載・雑上・九四・周防内侍〉
 〈古今・春下・八四・紀友則〉
 〈古今・春上・四三・紀貫之〉
 〈続後撰・雑中・一〇三・後鳥羽院〉
 〈古今・秋下・四九・文屋康秀〉
 〈千載・夏上・二六・藤原定定〉
 〈詞花・恋上・三五・大中臣能宣〉

85 流るれもあへぬもみぢなりけり
 47 名こそ流れてなほ聞こえけれ
 81 なほあまりある昔なりけり
 3 なほ恨めしき朝はらけかな
 76 ぬれにぞぬれし色は変はらず
 91 聞のひまさへつれなかりけり
 21 ばげしかれとは折のらぬものを
 70 花ぞ昔の香にほひける
 82 花よりほかに知る人もなし
 94 人こそ知らね乾かむ間もなし
 84 人こそ見えね秋は来にけり
 39 人知れずこそ思ひそめしか
 20 人づてならでいふよしもがな
 62 人に知られでくるよしもがな
 98 人には告げよ海人の釣舟
 95 人の命の惜しくもあるかな
 86 人目も草もかれぬと思へば
 11 人をも身を恨みざらまし
 74 日は消えつつもをこそ思へ
 48 富士の高嶺に雪は降りつつ
 65 ふりゆくものはわが身なりけり
 78 ふるさと寒く衣こもうつなり
 25 まだふみも見ず天の橋立は
 49 まつとし聞かば今帰り来む
 51 松も昔の友ならなくに
 13 三笠の山にいでし月かも

75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
27	90	14	94	87	57	100	66	59	47	32	28	71	46	93	83	85	62	8	92	92	38	76	11	20	26
みかの原わきて流るるいづみ川 見つ見きとてか恋しかるらむ	見せばやな雄鳥の海人の袖さだにもぬれにぞぬれし色は変はらず	みちのくのしのぶもぢずり誰れゆゑに 乱れそめにし我ならななくに	み吉野の山の秋風さ夜ふけて ふるさと寒く衣うつなり	村雨の露もまだひぬまきの葉に 霧立ちのぼる秋の夕暮れ	めぐりあひて見しやそれとも分かぬまに 雲がくれにし夜半の月かな	もしきや古き軒端のしのぶにも なほあまりある昔なりけり	もろともにあはれと思へ山桜 花よりほかに知る人もなし	やすらはで寝なましものを小夜ふけて 傾くまでの月を見しか	八重葎の茂れる宿のさびしきに 人こそ見えぬ秋は来きにけり	山川に風のかけたる欄は 流れもあへぬもみぢなりけり	山里は冬ぞさびしきさまりける 人目めも草もかれぬと思へば	夕されば門田の稲葉おとづれて 華のまろ屋に秋風ぞ吹く	由良のとをわたる舟人かちを絶え 行方知らぬ恋の道かな	世の中は常にもがもな渚 小舟の綱手かなしも	世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥にも鹿ぞ鳴くなる	夜もすがらもの思ふころは明けやらで 聞かぬひまさつれなかりけり	夜をこめて鳥のそら音ははかるとも よに逢坂の関は許さじ	わが庵はは都のたつみしかぞすむ 世をうち山と人はいふなり	わが袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らね乾く間もなし	忘らるる身をば思はず誓ひてし 人の命の惜しくもあるかな	忘れじの行く末までは難ければ 今日を限りの命とがな	わたの原漕ぎいでて見ればひさかたの 雲居にまがふ沖つ白波	わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと 人には告げよ海人の釣舟	わびぬれば今はたおなじ難波なる みをつくしても逢はむとぞ思ふ	小倉山も峰ののみぢ葉心あらば 今ひとたびのみゆき待たなむ
《新古今・恋・九・葉・藤原兼輔》	《千載・恋四・六・殷富門院大輔》	《古今・恋四・吉四・源融》	《新古今・秋下・四・藤原雅經》	《新古今・秋下・四・寂蓮》	《新古今・雜上・四・式部》	《續後撰・雜下・三・順徳院》	《金葉・雜上・五・行尊》	《後拾遺・恋・六・赤染衛門》	《拾遺・秋・四・惠慶法師》	《古今・秋下・三・春道列樹》	《古今・冬・三・源宗子》	《金葉・秋・二・源經信》	《新古今・恋・二・曾禰好忠》	《新勅撰・羈旅・五・源実朝》	《千載・雜中・三・藤原俊成》	《千載・恋・二・俊惠法師》	《後拾遺・雜・五・清少納言》	《古今・雜下・九・喜撰法師》	《千載・恋・二・二条院讃岐》	《拾遺・恋四・七・右近》	《新古今・恋・三・三・儀同三司母》	《詞花・雜下・三・藤原忠通》	《古今・羈旅・四・小野篁》	《後撰・恋・三・元良親王》	《拾遺・雜秋・三・藤原忠平》
↑みそぞ夏ものしるしなりける	↑乱れそめにし我ならななくに	↑乱れて今朝は物をこそ思へ	↑身のいたづらになりぬべきかな	↑みをつくしても逢はむとぞ思ふ	↑みをつくしてや恋ひわたるべき	↑昔は物を思はざりけり	↑むべ山風をあらしと言ふらむ	↑ものや思ふと人のとふまで	↑紅葉ののしき神のまにまに	↑もれ出づる月の影のさやけさ	↑焼くや藻塩の身もこがれつつ	↑山の奥にも鹿ぞ鳴くなる	↑行方へも知らぬ恋の道かな	↑夢の通ふ路 人目めよくらむ	↑吉野のの里に降れる白雪	↑よに逢坂の関は許さじ	↑世をうち山と人はいふなり	↑世を思ふゆゑに物思ふ身は	↑わが衣手まに雪は降りつつ	↑わが衣手まに露にぬれつつ	↑わが立つ袖に墨染めの袖ぞ	↑わが身ひとつの秋にはあらねど	↑我が身世にふるながめせしに	↑われても末に逢はむとぞ思ふ	↑をための姿しはしとどめむ